



乃木二子塚古墳他 詳細分布調査報告

1982

松江市教育委員会

正誤表

頁	行・図表	誤	正
凡例	上, 8	同上文化係長 加藤 瞳	同上文化係主任 加藤 瞳
凡例	下, 6	出土遺物の検討	出土 遺物の検討
8	上, 10	(第11図1, 2)	(第12図1, 2)
8	下, 5	(第11図3)	(第12図3)
8	下, 1	溝 底	濠 底
12	上, 2	(第11図7)	(第12図7)
12	上, 3	(第11図4)	(第12図4)
12	上, 6	(第11図5, 6)	(第12図5, 6)
15	下, 5 ~ 6	後方部の北側斜面と 西側への隙.	後方部の北側斜面と 西側への隙.
18	出雲間谷西道路の特徴 第1章	倒立した線が	倒立した瓦束が
18	上, 1	使わ水方も知れぬ	使わ水方がも知れぬ

凡　　例

1. 本書は松江市教育委員会が、昭和56年度において国庫及び、県費補助金を得て実施した乃木二子塚古墳他の詳細分布調査の報告である。
2. 調査事業の組織は下記のとおりである。

主 体 者	松江市教育委員会	教 育 長	内 田 桂
事 務 局	松江市教育委員会社会教育課		
総 括	同 上	課 長	石 飛 達
庶務会計	同 上	文 化 係 長	中 西 宏 次
	同 上	文 化 係 長	加 藤 瞳
担 当 者	同 上	文 化 係 主 事	岡 崎 雄 二 郎
調 査 員	同 上	文 化 係 主 事	中 尾 秀 信
	同 上	文 化 係 指 導 員	佐 々 木 稔

3. 作業にあたっては、下記の方々の協力を得た（敬称略）
三島栄子、野津栄子、野津静枝、野津貴美子、柳浦和恵、田中ケイ子、岩成萃子、清水末子、
岩成礼子、木村タケノ、山野洋子、中倉智恵子、木村宮子、中倉幸恵、加藤和江、吉岡八重子、
青山安子、柳浦トキノ、野津清子、吉岡和子、林喜和子、山崎多恵子、福島久子、高麗朝子、
加藤三郎、加藤幾喜、福島虎市、加藤博己、野津みち子
4. 本書の編集は、主として岡崎と中尾が行なった。
5. 図面の添書は、中尾が行なった。
6. 古墳の構造及び出土遺物の検討については、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表す次第である。

島根大学 名誉教授 山 本 清

島根大学法文学部 助教授 渡 辺 貞 幸

島根県立松江農林高等学校 教諭 池 田 清 雄

島根県文化課 主事 松 本 岩 雄

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 位置と歴史的環境	3
III 調査の概要	6
1. 乃木二子塚古墳	6
(1) 従前の調査	6
(2) 今回の調査	6
(3) 古墳の構造	15
(4) 遺物の検討	15
2. 下沢遺跡	19
(1) 従前の調査	19
(2) 今回の調査	20
3. 二子塚古墳	20
(1) 従前の調査	20
IV まとめ	21

I 調査に至る経緯

松江市では人口の増加に伴ない広大な郊外の水田、山林を計画的に換地して宅地化を図っていく区画整理事業を推進しているが、南部では上乃木、浜乃木、乃木福富町地区一帯の山林、田、畑など総面積 72.64 ha の土地を宅地や道路などに造成することになった。

この事業の正式名称は、「松江圏都市計画事業、乃木土地区画整理事業」といい昭和 46 年度から開始された。ところが、この計画区域内には、周知の遺跡として「乃木二子塚古墳」¹ 「二子塚古墳」 「下沢遺跡」が所在しているにもかかわらず、用途地域決定の際、これらの 3 遺跡の文化財保護上の考慮がなされなかつたので、3 遺跡を含む一帯は、商業区域に編入されてしまった。

一方、建設省では、松江市内を通過する国道 9 号線の混雑緩和のため、松江市南部にバイパス路線を設けることになり、そのルート決定にあたっては最も埋蔵文化財包蔵地の該当の少ないことが最大の条件とされた。

結局、区画整理事業の中央部を東西に横断し、かつこれら 3 遺跡のすぐ北側に接するかの如くルートが決定された。これら 3 遺跡をとりまく 2 つの大きな事業は、昭和 57 年度において近隣の松江総合運動公園を主舞台として、第 37 回国民体育大会が開催されることもあって、昭和 56 年度から急速に工事が進行中である。



第1図 調査位置図

そこでこれら3遺跡の取り扱いが問題となり、関係当局の間で早急に協議する必要が生じた。区画整理事業を主管する松江市都市開発部区画整理課からは、昭和54年7月に至り取り扱いについての協議があった。これを受けた教育委員会では3遺跡の内、乃木二子塚古墳については、島根県文化財保護審議会において島根県指定史跡とすべき答申を得ていることから、島根県教育委員会と協議することになった。

協議を受けた県教委文化課では、乃木二子塚古墳は前述のとおり県指定史跡にすべき価値があるという答申を得た古墳であることに鑑み、周濠部分を含めて現状のまま保存できるように指導してきた。又区画整理事業区域内には、周知の遺跡の他にもまだ多数の遺跡の存在が考えられるとして、全域にわたり分布調査を実施するよう指導してきた。

市教委では、こうした県教委の見解をふまえた上で、下記のとおり区画整理課へ見解を伝えた。

1. 乃木二子塚古墳は、島根県文化財保護審議会において島根県指定史跡にすべきであるとの答申を得ている極めて重要な古墳でありますので、周濠部分を含めて現状のまま保存できるよう御配意ください。
2. 下沢遺跡と二子塚古墳については、事前に発掘調査を実施し、その保存については調査の結果により判断します。
3. 2の発掘調査については、昭和54年度と昭和55年度の2か年にわたり実施します。

第1項については、今後区画整理課と銳意協議を継続していくことになった。第2項については、昭和54年度において下沢遺跡の中心部を調査し、昭和55年～56年度においては全域の分布調査によって明らかとなった長砂古墳群、後友田古墳、横松古墳、友田遺跡を調査してきた。

乃木二子塚古墳の保存については、現実的に3つの方策が考えられた。第1は、事業区域内の用途地域の変更をして公園用地とする。第2は、国の史跡に指定して土地買上げを実施する。第3は、事業区域内の公共用地と換地する。というものである。

市教委としては、第1の方策を強く主張したが、用途変更是極めて困難であるとのことであった。そこで第2の方策を検討したが、財政上の理由からこれまで困難性が予想された。残る第3の方策について検討した結果、区域内の県有地との換地を実施することによって公有地化を図るという方向性が打ち出され、現在県と市で正式に協議がなされているところである。

市教委としては、これまで問題の焦点となってきた乃木二子塚古墳が、これまで2回の測量調査がなされただけで正確な規模、平面企画、築造年代等が不明確であったことからこの際調査を実施して、当古墳の価値を明確にする必要が生じた。

そこで、昭和56年度において、他の2遺跡ともども詳細な分布調査を実施した。

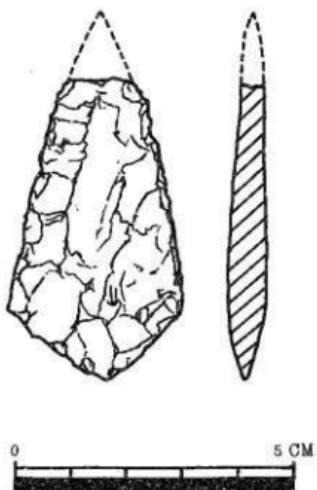
II 位置と歴史的環境

当遺跡群の所在地籍は、松江市上乃木町字二子塚にあり、乃木二子塚古墳が2738、1508番地、二子塚古墳が2738-1、1503番地、下沢遺跡が1509、1615、1616番地に所在する。これら3遺跡はお互いに接し南部から派生する低丘陵の尖端に位置している。南部の丘陵上には先述の長砂古墳群²があった。調査の結果は、一辺10~15mの比較的小型の方墳で構成される古墳群で、主体部は盛土中の浅い位置に略長方形土壙を有し古式の須恵器類を副葬するものであった。同じ墳の須恵器は、松江市西川津町の金崎古墳群中第1号墳や、松江市矢田町の石屋古墳などで出土しており、山陰地方の須恵器編年で第1期に該当するものであるが、長砂古墳群出土品の中には鷹形線（たるがねたはう）類や把手付碗も含まれ一段と古い様相がうかがえる。さらに西方の丘陵地帯には、丘陵の西半分つまり乃木福富の水田地帯に向いた丘陵上に遺跡がかたよっている。

後友田古墳は、直径13×11mの円墳と思われるが中央部に国土地理院の4等水準点が設けられた際に墳丘がかなり削りとられており、主体部は遺存しなかった。しかし墳頂に点々と須恵器、土師器片が散在していた。出土須恵器には蓋坏類や壺の破片があり、これも長砂古墳群同様古式の須恵器に属するものであった。



第2図 周辺の遺跡分布図



第3図 有舌尖頭器実測図

た。長方形石圓土壙内からは副葬品として、ひすいに類似した綠石製の勾玉、碧玉もしくは緑色凝灰岩質の小形管玉、黒曜石やサヌカイトで作られた石鏡が発見された。四隅突出型墓はこれらの石圓い墓の内、数基をこわしてその上に集成されており北半分を遺存するだけだが、北辺は一辻 11 m を計りその東西両角が外方へわずかに突き出している。裾には三段の貼石を設けその外側に周溝があった。上半部には 50 cm 以上の盛土があった。主体部は斜面に推定され不明であるが、周溝から弥生後期の甕が 1 個体分出土している。

こうした 3 つの異なる形態の弥生期の墳墓の集合した墓地は、松江市内はもとより山陰地方では極めて類例に乏しく、石圓い墓や、墳丘墓、出土品の特徴から石見山間部～広島県地方にかけての地域に類似の遺跡が認められる。

この友田遺跡の所在する丘陵の西方には、松江市内では比較的広い面積を有する乃木福富の水田地帯が南部急部（いんべ）地区から北部宍道湖に向けて南北に開けている。宍道湖岸の国道 9 号の工事現場からは、縄文時代早期頃の有舌尖頭器が採集されており、松江市内ではもっとも古い遺物となっているので、かなり古くから人々が住みついていたことが知られる。

平野を流れる忌部川の下流域の自然堤防上には次田遺跡が所在する。この遺跡は弥生前期～古墳時代前期の古式土師器までの土器類を出土している。特に石庖丁の出土は松江市内でも珍らしいもの

友田遺跡は、西方へ突き出た舌状丘陵上にあり弥生中期中葉から後期後半にかけての集団墓地であることが判明している。すなわち、丘陵の基部には一辻 8 m × 12 m ほどの長方形墳丘墓が 5 基所在している。これらの墓は、墳丘下半部を地山を切削加工して整形し、裾に貼石をまわし外方に周溝をめぐらす。上半部には 50 ～ 60 cm の盛土を施し、墳央部盛土下の旧表土上に複数の長方形土壙を設けるものである。副葬品は皆無であったが、周溝内から弥生中期中葉～後期前半にかけての無頭塗、小型の甕、高杯などが出土した。

丘陵先端部には、四隅突出型墓と思われる方形墓 1 基とそれに先行してつくられた 20 基前後の長方形石圓い土壙が発見された。

注3

である。このことによって乃木福富の平野では他地域と同様、弥生前期頃から水稲耕作が開始され、中期以後畠田遺跡でみられるように、集団内部の階層分化がはじまり、後期には一定程度の権力をもった首長が誕生していった過程がうかがわれる。二子塚古墳の北・東部にかけての対岸の丘陵には古墳など遺跡はさほど密には分布していない。その中で上乃木町所在の向荒神古墳は、昭和 55 年度において、県道上乃木菅田線の改良工事に際して調査したが、その結果一辺 18 m 高さ 2.5 m 以上の中規模の方墳で、丘陵上にありながら周濠のめぐっていることが注意される。主体部は未調査であり築造年代は不明であるが、周濠内出土の須恵器片などからおおまかに後期頃の古墳であろうと推定される。^{注5}

III 調査の概要

1. 乃木二子塚古墳

(1) 従前の調査

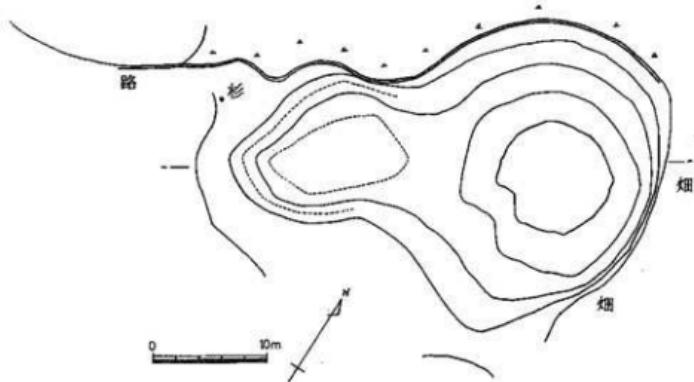
本古墳については、所有者である景山幸二氏が、代々伝えられてきたところによれば、昔、殿様が鷹狩りをされた折りにこの高台にのぼりその様子をご覧になった場所であったということであるが、「二子塚」という土地の字名の示すとおり地元民は、古くから二つの山のようになつた塚であるという認識があったと思われる。しかし、この二つの山が、乃木二子塚古墳の前方部と後方部を指しているのか、それとも乃木二子塚古墳のすぐ西隣に所在する二子塚古墳を含め、2つの古墳のことを総称していたのか定かではない。

ところで、本古墳が考古学研究者にはじめて注意されたのは戦後になってからのことである。すなわち当時若手の考古学研究者であった井上猶介、岩佐文子、笠井信男の3氏によって昭和22年7月8日に200分の1の平板測量が実施された。この図によれば、平面形は前方後円墳の如くであり、前方部が長方形ではなく前端が尖った形となっている。全長は38m、後円部はさしわたり22~25m、前方部のほうは、18mを測り、高さは前方部1.5m、後円部3mほどである。墳丘の南部と西部には幅3mほどの周濠がまわっていることがうかがえる。

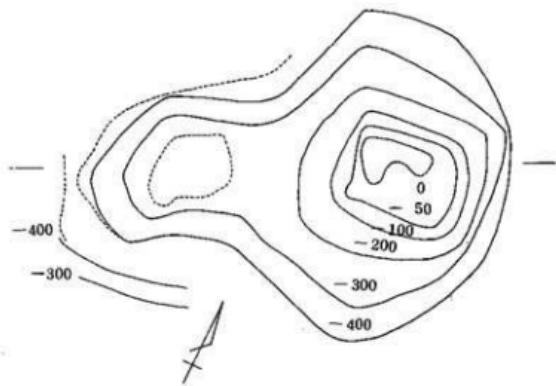
降って、昭和29年9月5日、当時、島根大学助教授であった山本清先生の手によって再度測量が実施されている。そのときの図面によれば概略前方後方と判断されるが、後方部は前方部の向きと整合性をもたず、後方部の主軸の方向は東西であるに対し、前方部の主軸の向きは東北-西南となっていることが注意される。全長は38m、前方部長18m、高さ1.6m、後方部長20m、高さ4mを計る。前方部の前端はやはり尖っており、後方部の北辺と南辺は崩れたためかセンターの間隔が著しく広がっている。又墳頂部には盗掘を受けたためか凹みが認められる。

(2) 今回の調査

調査に至る経緯については先述したとおりである。今回の調査の目的は、古墳の基本的なデータと概要を知ることにあったので、墳丘部分や主体部は調査せず、墳櫛部分や周濠と推定される部分について調査した。すなわち、後方部の北東角付近に下沢遺跡との調査をかねたS-1区を、くびれ部の南側にはS-2区を、後方部の中央北側CN-2区を、くびれ部の北側にはN-3を、前方部前端の周濠部分をN-4区とした。



昭和 22 年の測量図



昭和 29 年の測量図

第4図 従前の測量平面図

S-1区

調査区のほぼ中央部を西から東へむけて幅4.7mの落ち込みが認められたので、さらに精査したところ、南側の線はほぼ直線的に東方へ延びていくが、北側の上端の線はトレンチ両端から5.8mの地点でほぼ直角に北側へ折れ曲がっていくことが分った。この落ち込みは、下端幅3.4m、深さ45cmほどの幅広で浅いものであるが、水田や畑に利用されていたことを考えると、幾分地山が削平されたと思われるが、本来は上端のレベルはもう少し高かったものと推定される。この落ち込みの線は、後方部のセンターの線とほぼ平行、直角の関係にあるので、下沢遺跡に関する溝というよりは、乃木二子塚古墳の後方部をとりまく周濠の一部と考えられる。周濠内の堆積土は耕作土層の下に黒褐色土層が12cm、暗褐色土層が10cm、黒褐色土層が16cm、地山ブロックを含む褐色土層が15cmの順で地山である濠底に続いている。この内、下部の黒褐色土層中からは、糸切り底を有する壺類が出土しており(第11図1、2)最下層からもそれ以外の層からも、古墳に関連する土器などは出土しなかった。ただ耕作土層中からは、古墳時代の須恵器片をはじめ江戸期以降近年の陶磁器片や、黒曜石の破片などが出土していることから、上部は耕作によりかなり擾乱を受けたと思われる。さらに周濠の角から残存している後方部の東端までは、4.5mの間隔であり、その部分の墳丘盛土や地山が開削されてしまったことが考えられる。

この周濠の墳丘寄りの上端の線は直角に折れ曲がったのち現在の作業小屋付近を通過して、昭和54年度に下沢遺跡を調査した折判明したCトレンチ内の周濠の上端の線につながっていくものと思われる。又周濠の外まわりの上端の線はS-1区のトレンチのすぐ東側で北へ折れ曲がり、やはり昭和54年度の調査で明らかとなったBトレンチ内の周濠の北側の上端の線につながるものと予想される。

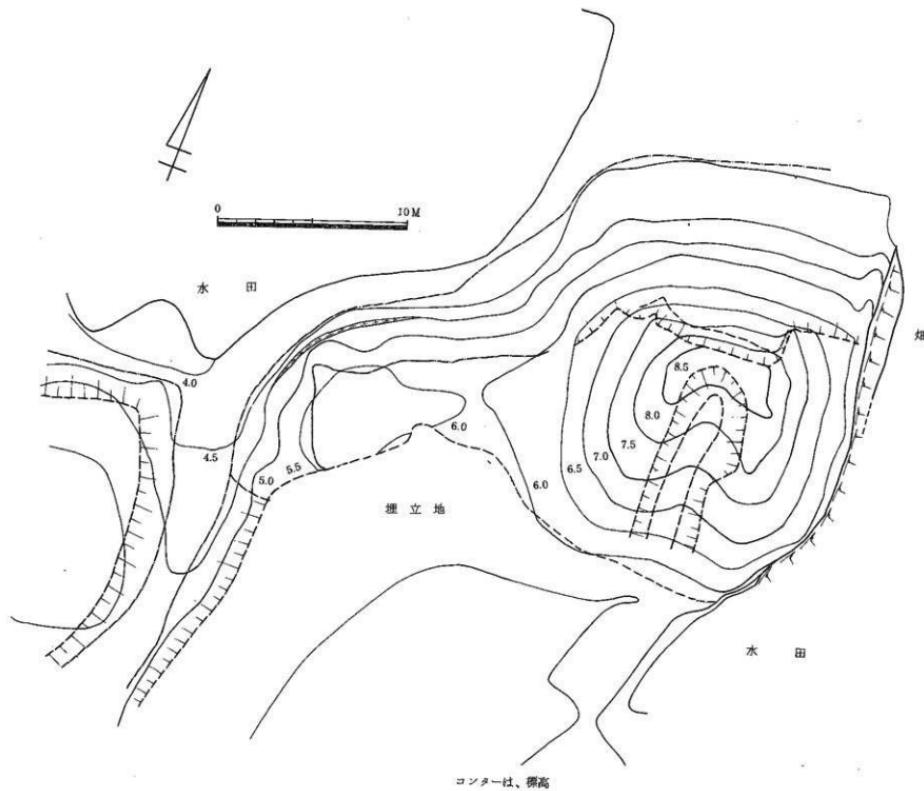
N-2区

後方部の北側の墳頂と周濠の確認を目的として設けた。調査の結果、上端幅3m、下端幅0.75~0.97m、深さ0.31mの比較的浅い溝が確認された。この溝は、墳裾にあることからやはり周濠の一部と思われる。濠底にはさわらし10~30cmの角のある転石が6個落ち込んでいた。又墳丘寄りの法面には高台付の須恵器の环や土師器の細片が密集して発見されたが、古墳時代の遺物は皆無であった。(第11図3)

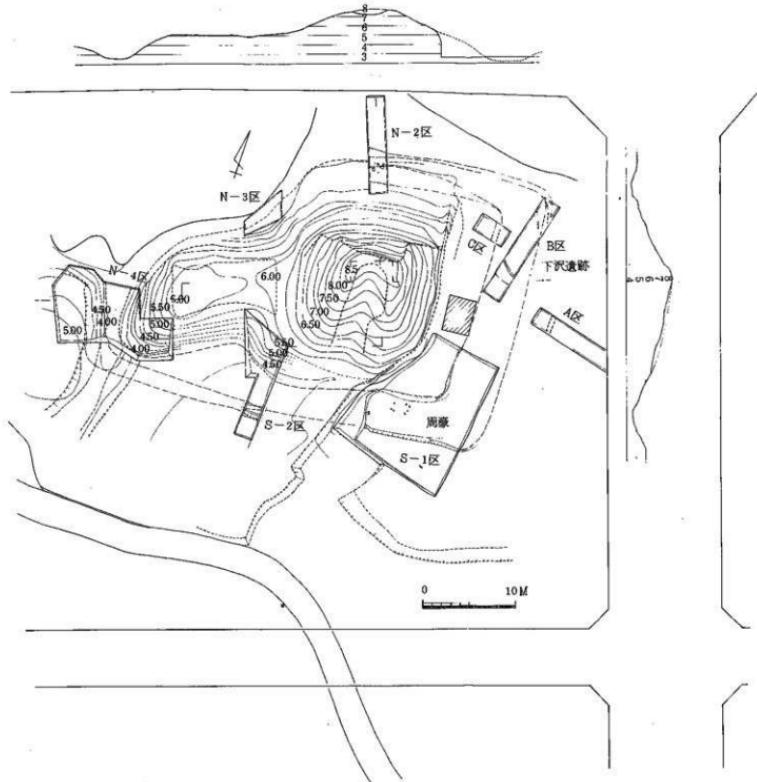
墳頂は2段となっているがトレンチ南端から急角度で後方部の墳頂部へ続いている。

周濠の北側の地表面は、トレンチ北端までわずかに5cmほど高くなるだけで、ほとんど水平といつてよい。遺物も地表面を加工した形跡もなかった。

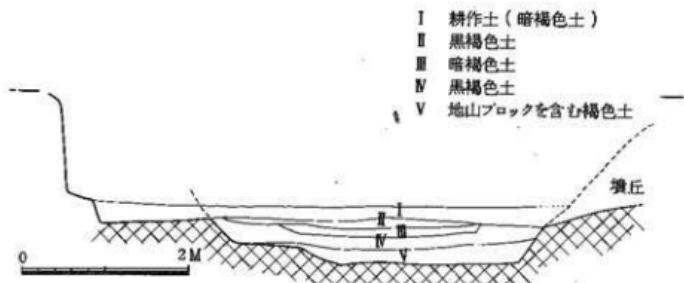
堆積土層は周濠北側の上端で47cm、溝底で87~100cm、墳裾で64cmとかなり厚い。これ



第5図 調査前測量平面図



第6図 穹掘調査成果平面図



第7図 S-1区西端周濠断面図

は、後方部斜面がかなり崩れた状態を示しており、恐らくは畠地に開墾されたためと考えられるので、その折りに土が均らされたことによるものであろう。

堆積土の上部は45～60cmほどの表土とあまり変わらぬ褐色土層で、その下部には、地山面に暗褐色～黒褐色土層が堆積で10cm、濠内で25cmほど堆積し前記の遺物を含んでいた。周濠北側の平坦面上には褐色土が20～30cm堆積しているだけで変化はなかった。

N-3区

くびれ部の北側の線を究明するために設けた。調査の結果、表土から地山面までは上部が厚み20cmの暗褐色土、下部が厚み4～15cmの褐色土層となっている。地山面はトレンチ中央部付近でくびれ部に沿って墳丘側への立ち上がりが認められた。これが墳壙の線と思われる。出土遺物は、上部暗褐色土層の下位から集中的に須恵器片が発見された。これら須恵器片は長さ1.3m×幅0.65mの範囲に集中しており、他にさしわたり5～15cmほどの砾、転石が散在していた。須恵器片は高环形器台の脚部の破片で殆んどが同一個体のものであり、別個体の高环形器台の脚部の破片も2片あった。これらの須恵器片は、本古墳に副葬もしくは供獻されたものと考えられる。

N-4区

前方部前端をめぐる周濠とその対岸の状況ならびに前方部の南側の状況を観察するために設定した。

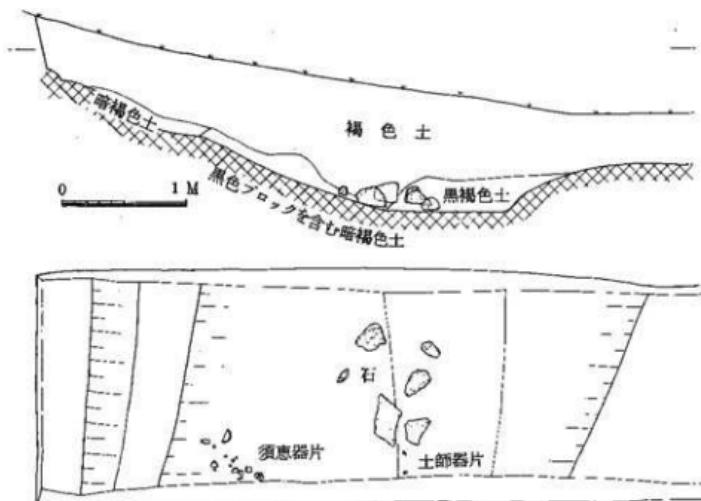
調査の結果、前方部の前端は上部平坦面から2.25m下がって周濠に統く。周濠の幅はトレンチ南部で1.5m、北部で2.8mを計る。周濠は北へいくにつれ幅を広げていく傾向にあるが、これは前方部の前端が対称的ではなく前方部北側の長さが南側の長さに比べて異常に短くなることに関連している。周濠はトレンチ南部で前方部南側の線に併行して東方後方部の方向へ

曲がっていくようである。周濠内の北部対岸の立ち上がり付近から土師器の壺が1個体分出土した。(第11図7) 45cmの間隔を置いて2群に分かれている。その他須恵器片が若干出土している。(第11図4) 周濠の対岸は高さ1.0mほどで上部が平坦になっており北側で西方へ折れ曲っている。もとの自然丘陵を遺存しているものと考えられる。

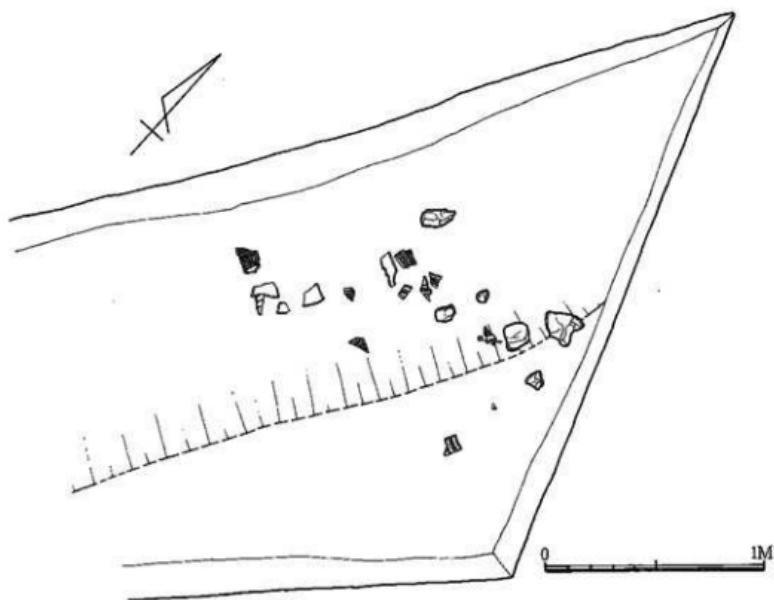
対岸の北側角部分の上端から円筒埴輪片が数点出土した。図に示したものは、突堤の部分で古墳時代中期～後期に通有のものである。(第11図5、6)

S-2区

墳丘の南側のくびれ部分の状況を確認するために設定した。昭和55年、乃木二子塚古墳保存問題の協議のため、周濠の有無の確認のため調査した細長いトレンチの西側に拡張した調査区である。55年調査トレンチ断面を見るに、後方部における周濠の下端幅は3mほどで、対岸は1.5mほど高くなっている。後方部から前方部にかけての周濠部分は、昭和40年代に宅地造成を目的として埋め立てられたとのことであり、山本清先生のお話からは、以前は周濠がはっきりと見られたという。したがって、埋め立て時の埋土が分厚く周濠内に堆積していた。

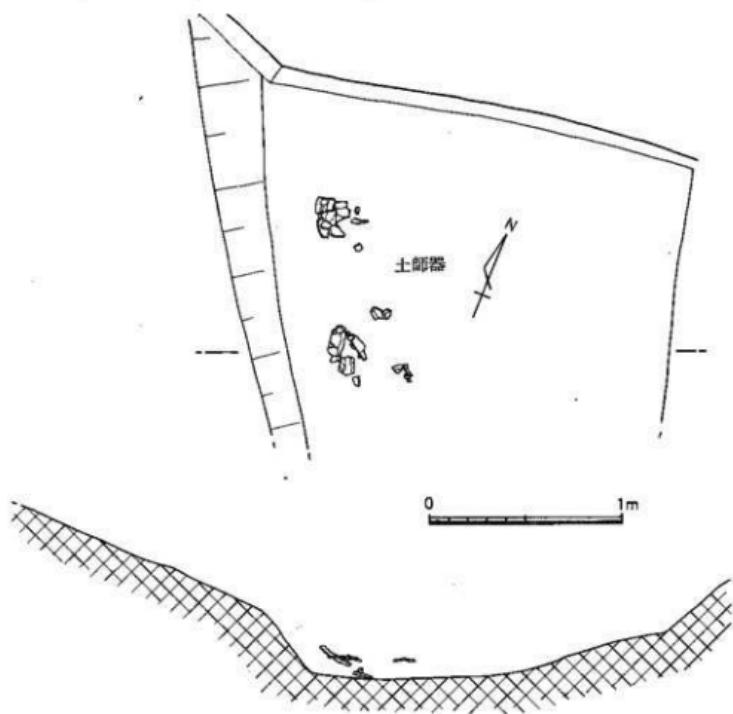


第8図 N-2区実測図

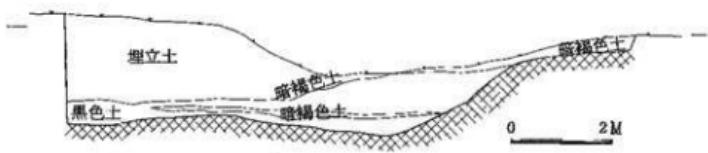


第9図 N-3区実測図.

今回調査の拡張区では、くびれ部が確認出来た。後方部の墻垣の綫はくびれ部では4mほど奥へ入り込み、そこから前方部前端角に向かって前開きの角度で開いていく。墻垣から前方部の上部平坦面までの高さは1.5m、後方部墻頂部までは4.0mを計る。



第 10 図 N-4 区周濠実測図



第 10 図 N-4 区実測図

(3) 古墳の構造

これまでに調査した箇所は、部分的なトレンチであり、古墳の当初の姿を考えるには、極めて不十分であるが、一応大づかみに考えてみることにする。

現況の平面形は、前方部と後方部の中軸線が一直線にならず、およそ 19° ほどの角度をもって、前方部が南へ折れている。果してこれが本来の平面企画にもとづいているのであろうか。そこで問題となるのは、前方部の北側斜面である。ここは水田となっており、墳丘の一部を削って、後方部から西部へ抜ける道が通っている。このような現況地形から考えると昔から水田面積を拡大するために、かなり大がかりに墳丘の削り取りが行なわれたようである。このことは後述する二子塚古墳についても云えることである。したがって、そのような改変が、これまでに行なわれたと仮定するならば、本来の前方部は、もっと水田側に開いていたと思われる。その角度は 30° である。中軸長は 14 m である。

ただ前方部前端の下端の線が、中軸線に直交せず、北側にいくにつれて短くなっているが、これは、当初からそうであったと思われる。これと似た例は、松江市、手間古墳（全長約 60m の前方後円墳）にみられる。^{注6}

次に現況でみると、後方部に比して、前方部は著しく低く、かつ平坦となっているが、中期型の古墳ということになると通常の場合は、前端に向けて、もう少し高くなっていたと思われる。後方部は、南北辺 24 m、東西中軸長 22 m を測る。

こうしてみると、当古墳の中軸長は 36 m、前方部長 14 m、後方部長 22 m、前方部高 2.25 m、後方部高 4.0 m を計り、前方部が、比較的短かく前開きとなっていることが注意される。この墳丘をとりまいて、幅 1.5 ~ 4.0 m ほどの周濠が所在することが確認された。主体部については、未調査で不明というしかないが、後方部の中央から南側斜面にかけて、凹地があり、盗掘の痕跡と思われる。その大きさ範囲からすると、石室の類のように、大きな施設ではなく、木棺直葬のような小規模の主体部ではなかったと思われる。

(4) 遺物の検討

N-3 区出土の高環形器台

N-3 区出土の高環形器台は、脚部の破片のみで、全周の 4 分の 1 が遺存していた。一方後方部の北側斜面で西側くびれ部寄りの斜面で測量調査の際、表面採集した須恵器片 2 片は、共に接合し、高環形器台の環部になるもので、焼成や胎土の状態から N-3 区出土のものと同一個体であると判断された。この環部の破片は、口縁部から体部中ほどにかけてのもので、脚部との接合部分を欠失している。

復元器高 10.9 cm、口縁径 33.6 cm を計る。口唇部は、外面が直立し内面は 1.7 cm ほど、やや

凹んで平坦になっている。そこから下方へは、ゆるやかに内反している。体部外面は2条の太い沈線で区画され、口縁部までの2区画にそれぞれ、14条単位の波状文が施されている。体部の下半部には、間隔の広い叩き目を遺存する。体部内面は、口唇部から8cm下がったところから下方の部分に同心円の押し当て具の痕跡を認める。

次に脚部は復元高22.9cm環部との接合部分の復元直径8.8cm、脚端部の直径21.6cmを有する。接合部からゆるやかにスカート状に下方へ開き、最下段の沈線の付近でやや内反し脚端部に至って再び外方へ突き出ている。厚みは脚端部に近い部分で1.0cm接合部に近い部分で1.35cmを計る。5条の太い沈線によって6段に区画され、各区内には、カキ目調整を施した後12条の波状文を施している。最下段を除いた5段の各区内に、三角形の透し穴を垂直方向にかつ4方にあけている。

内面は主に横ナデ調整を施している。脚端部付近の内面は、2段にわたって凹んでいるが、これは整形の際余分な粘土を取り落した痕跡と思われる。器台全体の復元高は33.8cmとなる。高環形器台破片は、他にも同じN-3区から2片、S-1区からも1片出土している。N-3区出土のものは、同様に三角形透し穴が垂直にならぶ式のものであるが、S-1区出土のものは、三角形透し穴が千鳥格子状に配列されるものであり數箇体が、墳頂部もしくは主体部の副

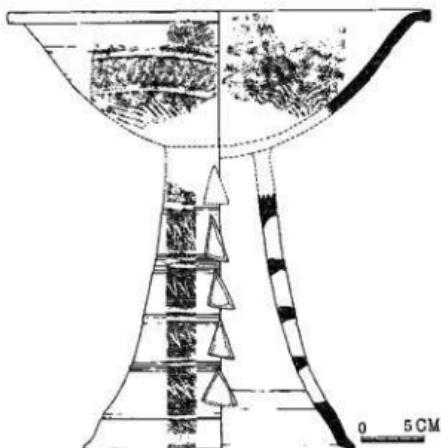
葬品として存在していたことが推定される。

ところで、この種の高環形器台は、県内では極めて出土例の乏しいものである。すなわち県内の出土例は第1表のとおりである。

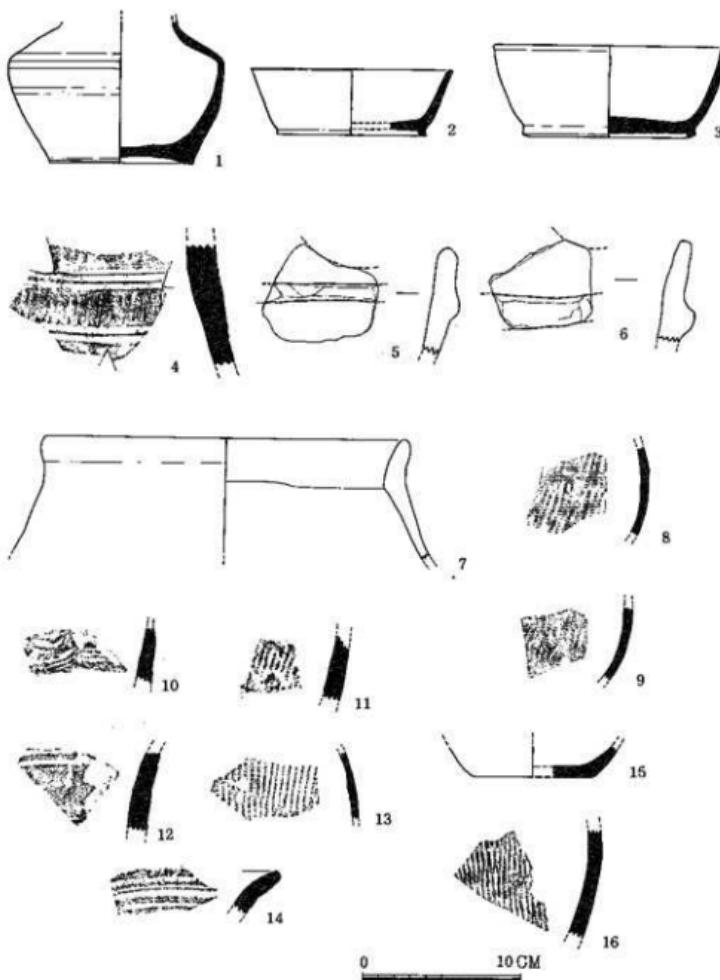
このように出土例のほとんどが、古墳からのものであり、大坪3号墳のように主体部から出土しているとしても、故意に破碎された状態であり、他の例は、造出部から出土するなど通常の須恵器副葬品とは性格の違うものではないかと考えられる。

注12

しかし、松江金崎1号墳や他地域の5世紀代の古墳のように、



第11図 高環形器台実例図



第 12 図 出土遺物実測図

第1表 島根県内出土高坏形器台一覧

遺跡名	遺跡の概要	出土箇所	年代	特徴
伯太・長尾古墳	消滅不明 現在果樹園	不明	初期須恵器	脚部の器高 20 cm 余り、三角状の突帯区画内に波状文、長方形透しを千鳥格子状に配列、坏部には、コンバスを用いた波状文あり。注 7
松江・石屋古墳	一辺 40 m、高さ 7.5 m の大型方墳造出部を 2 カ所設ける。	北西の造出部	山陰の須恵器編年 I 期	復元高 33.15 cm、長方形と三角形の透しあり。注 8
安来・大坪 3 号墳	直径 13 m、高さ 2 m の円墳	第 1 主体	II 期	器高 30 cm、3 段 3 方透し、破碎された状態で出土。注 9
松江・乃木二子塚	長 36 m の前方後方墳周濠を有する。	北側くびれ部 N-3 区内	II 期	復元高 33.8 cm、脚部は三角形透し穴を 5 度 4 方につける。
松江・大庭鳥塚	南北辺 42 ~ 44 m、東西辺 40 ~ 42 m、高さ 10 m の大型方墳造出部を 2 カ所設ける。	南の造出部直下 水田中 7 トレンチ出土	II 期	3 段以上の区画を有する脚部の破片千鳥格子状に三角形透しを配列。注 10
出雲・間谷西遺跡	低丘陵尾根平坦部に掘られた幅 0.7 ~ 1 m、長 7 m、深さ 15 cm の細長い溝。	溝中に直立	III 期	坏部に倒立した縁が潜着したもの 2 枚、凹線文の区画内に三角形と長方形透しあり。注 11

※ 他に松江・金崎 1 号墳堅穴式石室副葬の筒形器台がある。

堅穴式石室内に他の須恵器と同じように副葬されている例も多いので出雲地方独特の使われ方も知れない。

前方部前端出土の須恵器

前方部の前端の南側上部平坦面のほとんどの表土面から採集した一群の須恵器片、2 種ある。1 つは大型の壺もしくは壺の体部の破片で大量にある。外面は平行叩き目文、内面は、同心円の押し当て具の痕跡を遺存する。器肉は 8 mm ほどである。(第 12 図 10 ~ 13) 他方のものは、器台のような器種の口縁部又は、脚端部である。いずれの破片も表土に長らくあった関係で著しく、風化しており詳細な観察や復元が不可能である。又古墳築造当初から出土場所にあったものかどうかも不明である。(第 12 図 14)

その他の表面採集品

壺の破片と壺の破片が認められる。

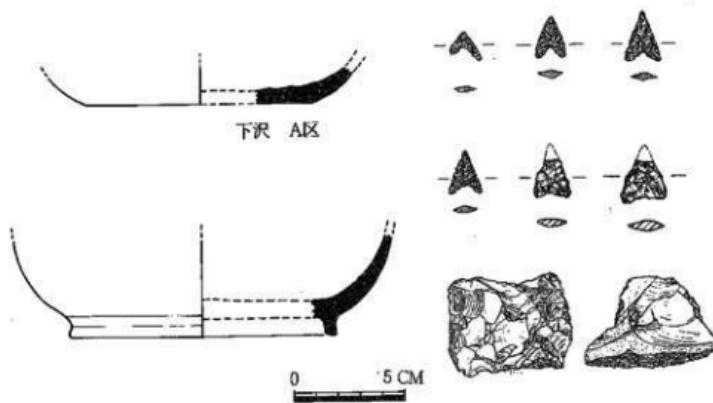
壺の破片は外面平行叩き目文、内面は押し当て具の同心円文を残すものと消去したものがある。(第12図 16)

壺の破片は、外面平行叩き目で整形した後水平方向にクシ目をつけるもの。(第12図 8、9)

2. 下沢遺跡

(1) 従前の調査

遺跡の範囲と概要を把握する目的で、昭和55年3月4日から昭和55年3月27日までの計20日間実施した。調査は、第6図のとおり長さ30mのAトレンチ、長さ12mのBトレンチと、それに直交する長さ3.4mのCトレンチを設定した。Aトレンチでは、西寄りに10cmほどの低い段があった以外に特に遺構は見当たらず、地山面はゆるやかに東方へ傾斜していく。遺物は黒曜石片や須恵器片、土師器片がトレンチの西半分の土層から出土している。BトレンチとCトレンチの調査の結果では、南から北へかけてトレンチを斜めに横断する上端幅5m、深さ65cmの濠が確認された。この濠は、乃木二子塚の東側の周濠の一部と思われた。Bトレンチの南端では、地山面がゆるやかに高くなり一応の段を形成していたことから、この部分から周濠が始まると北方へカーブして古墳を取り巻くものと推定された。B及びCトレンチの出土品は、古式土師器片、須恵器片、黒曜石製の石鏃とその石肩があり、縄文～弥生土器は皆無であった。



第13図 出土遺物実測図

このように、各時代の遺物が混在して出土したということは、恐らく近隣の地に各時代の居住空間があったのであろう。それが、乃木二子塚古墳築造の際や、後世の墳丘削平時にこの周縁に埋まつたのではないかと考えられる。

(2) 今回の調査

乃木二子塚古墳の後方部南東角と周縁の調査を兼ねて従前の調査区の南側の水田地に広い調査区を設定した。調査の結果は、既述したとおり、乃木二子塚の周縁が確認されたのみで、下沢跡に關係すると思われる遺構は全く確認されなかつた。当時の居住空間は、もう少し範囲を広げて調査する必要があるが、あるいは、現在の墳丘直下のIF表土上に遺構があるかも知れない。

出土遺物は、耕作土層から黒曜石の石鎌1個と、黒曜石の石屑が若干出土した。

3. 二子塚古墳

当初調査の予定であったが、乃木二子塚古墳の調査区の内、特にS-1区の広い調査区で、周縁が確認され、周囲が水田地帯であることも手伝って地下水が湧き、周縁内の排水が思うようにはかどらなく、この調査区でかなりの日数を費やしてしまつたので、二子塚古墳については調査出来なかつた。

ここでは、従前の山本清氏の踏査の状況と現況について述べておく。^{註14}

(1) 従前の調査

昭和25年2月7日の踏査による略測図からは、北側水田に出張る形で東西のさわわたし17m、南北のさわわたし19m、高さ3mほどの隅丸方形墳であることがうかがわれる。中央部に盗掘したと思われる細長い凹地が認められる。

続いて、昭和37年3月13日には、メモ書きが残っているのでそれを紹介しておく。

「5時半頃のバスにて出かけ、6時頃現場に至る。前方後方墳の方は築がよく茂り異常なきも、円墳の方は半分程開墾されて畠となつてゐる。それをよく見るに、開墾の際に出たと見え、畠の脇に径10～15cm位な塊状の角のとれた河石の如きもの、ざるに2杯ばかりおいてあり、又、別に箱（ネコ車にのせた？）の中にピールピンの割れなどとともに同様の石少し入れてあり、両所とも須恵器甕の破片相あり、数ヶ体のものの如し、器内面打痕ある常の品と思われるに、上記の口縁部あり、これは古いと思われる。門生窓跡出土品（第1期）も内面打痕あり、これも1式か少なくも2式位ならん。ただし橋目の簡単なるは如何？、古くてもこの様な例あるにや。尚、之と共に埴輪円筒破片2ヶあり、その内の1個を採集して帰る。」

以上の踏査メモから、本古墳は、円墳と見なされており、古式の須恵器甕の破片と円筒埴輪片が採集されたことが分かる。さらに墳丘上は大半が畠に開墾されていた。

その後、古墳の南側は、宅地として埋め立てられ、北側は、さらに削りとられ、水田となつてゐる。

Nまとめ

乃木二子塚古墳は中軸長 36 m、前方部長 14 m、前方部高 2.25 m、後方部長 22 m、後方部高 4 m を計る中規模の前方後方墳で、谷間水田に面した低丘陵の尖端を切削し周濠を穿つとともに盛土を施し墳丘を築造したものである。平面企画で特徴的な点は、前方部前端部分が中軸線に対して非対称となることである。恐らく何らかの制約があつてのことであろう。

こうした、平野部に面し周濠をもつ古墳は、松江市大庭町所在の大庭鷺塚や山代町所在の山代二子塚^{注15}、山代方墳などの大型古墳に見受けられる。特に、丘陵の先端部を切削した点は、大庭鷺塚と近似する。

本古墳出土の須恵器類の内、高环形器台の示す年代はほぼ 6 世紀前半頃を中心とした時期であり、これが本古墳の築造年代にもつながるものといえる。本古墳のすぐ南側の丘陵上には計 18 基の方墳から成る長砂古墳群がある。この古墳群は、当地方では比較的古式の須恵器を副葬・供獻しており、とりわけ樽形鏡や把手付鏡の示すように 5 世紀の中葉まで古墳群の築造年代がさかのばるようである。

とすれば、弥生時代以来、水稻耕作により生活してきた集団は、弥生中期～古墳時代前期に至り階層分化が進み、須恵器を入手することの出来た特定の集団が長砂古墳群を形成し、その中からさらに一段と特出し大きな権力を持ち合わせた豪族が乃木二子塚古墳を築造したのではないだろうか。

いずれにしても、乃木地区最大級の古墳として重要であり、現在関係者の間で、保存の方向で協議がなされていることは有意義である。

今回の調査で不十分ながら乃木二子塚古墳の概要が把握できたことは、今後の保存・活用の施策を考える上で大いに参考となるであろう。

注 1 山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」島根大学論集(人文科学)1号所収、昭和 26 年 3 月

注 2 松江市教育委員会「野田遺跡・向荒神古墳」1981

注 3 遺物は島根大学歴史学標本室に保管。ラベルに「松江市乃木福富町湖岸道路付近にて発見。田島君採集」とある。

注 4 島根大学考古学研究会「欠田遺跡試掘調査概報」菅田考古第 12 号所収。昭和 46 年。

注 5 注 2 と同じ。

注 6 山本清氏の御教示による。

- 注 7 伯太町役場「伯太町史」昭和 37 年 11 月所収、本文中で東森市良氏は『須恵器編年』の第Ⅰ乃至第Ⅲ型式前中迄の時期に当たるものといえよう。』と述べているが、県文化課 川原和人氏は、『古文化談叢 3』所収の「島根県発見の朝鮮系陶質土器」論文の中で実測図を変更し器形・施文から島根県下最古の須恵器としている。
- 注 8 岡崎雄二郎「松江市石屋古墳の調査」考古学ジャーナル 159 所収 1979 年 3 月。
- 注 9 島根県教育委員会「国道 9 号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」1981 年 3 月。
- 注 10 松江市教育委員会「史跡大庭塚発掘調査報告」昭和 54 年 3 月。
- 注 11 出雲市教育委員会「出雲車両基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1981 年 3 月。
報文では、筒形器台と考えているが写真・実測図を見る限りでは高環形器台とした方がよいと考える。
- 注 12 松江市教育委員会「史跡金崎古墳群 昭和 52 年度環境整備事業報告書」昭和 53 年 3 月。
- 注 13 恩田清「松江断都市計画乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」昭和 55 年 4 月 コピー。
- 注 14 山本清氏の野帳による。
- 注 15 注 11 と同じ。
- 注 16 島根県教育委員会「八重立つ風土記の丘周辺の文化財」所収 昭和 50 年 3 月。
- 注 17 注 16 と同じ。

二子塚古墳



乃木二子塚古墳全景
—北からみる—



後 方 部
—北からみる—



後 方 部
—北からみる—



後 方 部
—東からみる—



S-1区 周 漆



S-1区 後方部削平部分



S-1区 周 漆

S-1区 全 景



S-1区 西端周濠内堆积土断面



S-1区 周濠内須惠器片出土状態





S-1区 周 漢



N-2区 周 漢



同上 漢 底 部

S-3区 須恵器台出土状態



同 上

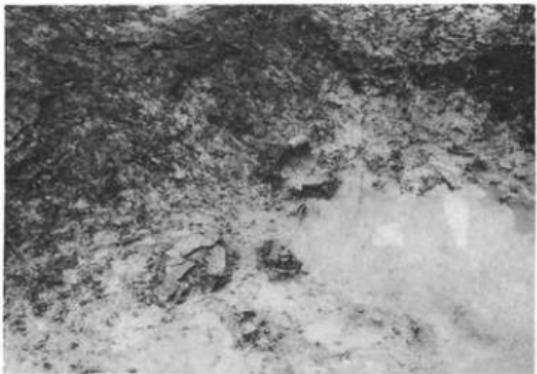


前方部前端←

S-4区 周 漢



N-4区 周濠南西角付近



N-4区 周濠内土師器出土状態



S-2区 くびれ部の状態



脚 部



坏部内面



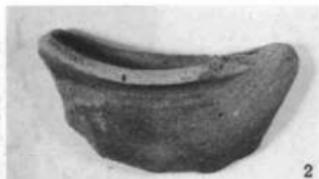
坏部外面



脚部近景



1



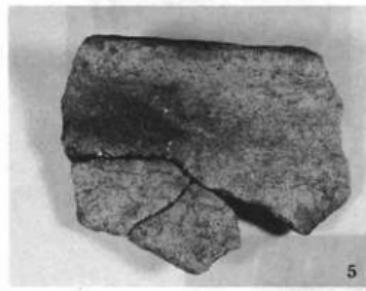
2



3



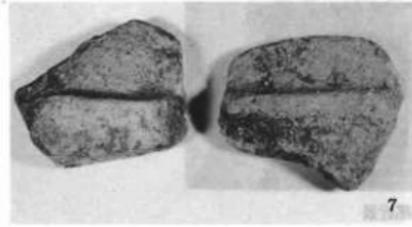
4



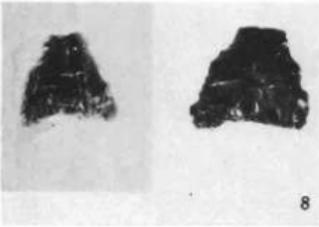
5



6



7



8